

横森赤台（東下）遺跡出土五輪塔の 形態と製作年代について

野代幸和

-
- | | |
|-----------------|------------|
| 1 はじめに | 4 五輪塔の形態分類 |
| 2 横森赤台遺跡の中世墓坑群 | 5 考察 |
| 3 墓坑出土五輪塔のセット関係 | |
-

1 はじめに

筆者は北巨摩郡高根町の国道141号（箕輪バイパス）の改築事業に先立って、横森赤台（東下）遺跡の調査に従事する機会を得た。本遺跡からは、15～16世紀代の墓坑群とその関連遺構が発見され、約200点の五輪塔が出土した。これらの五輪塔から、調査および報告書作成過程段階において紀年銘や梵字、戒名らしきものが墨書きで記されたものが多く認められ、墓が造営された実年代と五輪塔の形態分類から見た製作年代との相対性など興味深い内容が明らかとなってきた。しかし、報告書の入稿段階で紙数の都合から、これらの考察結果の大部分について掲載不可能となつたため、本来的には適切な場所ではないかもしれないが、この場を借りて発表させていただくことにした。

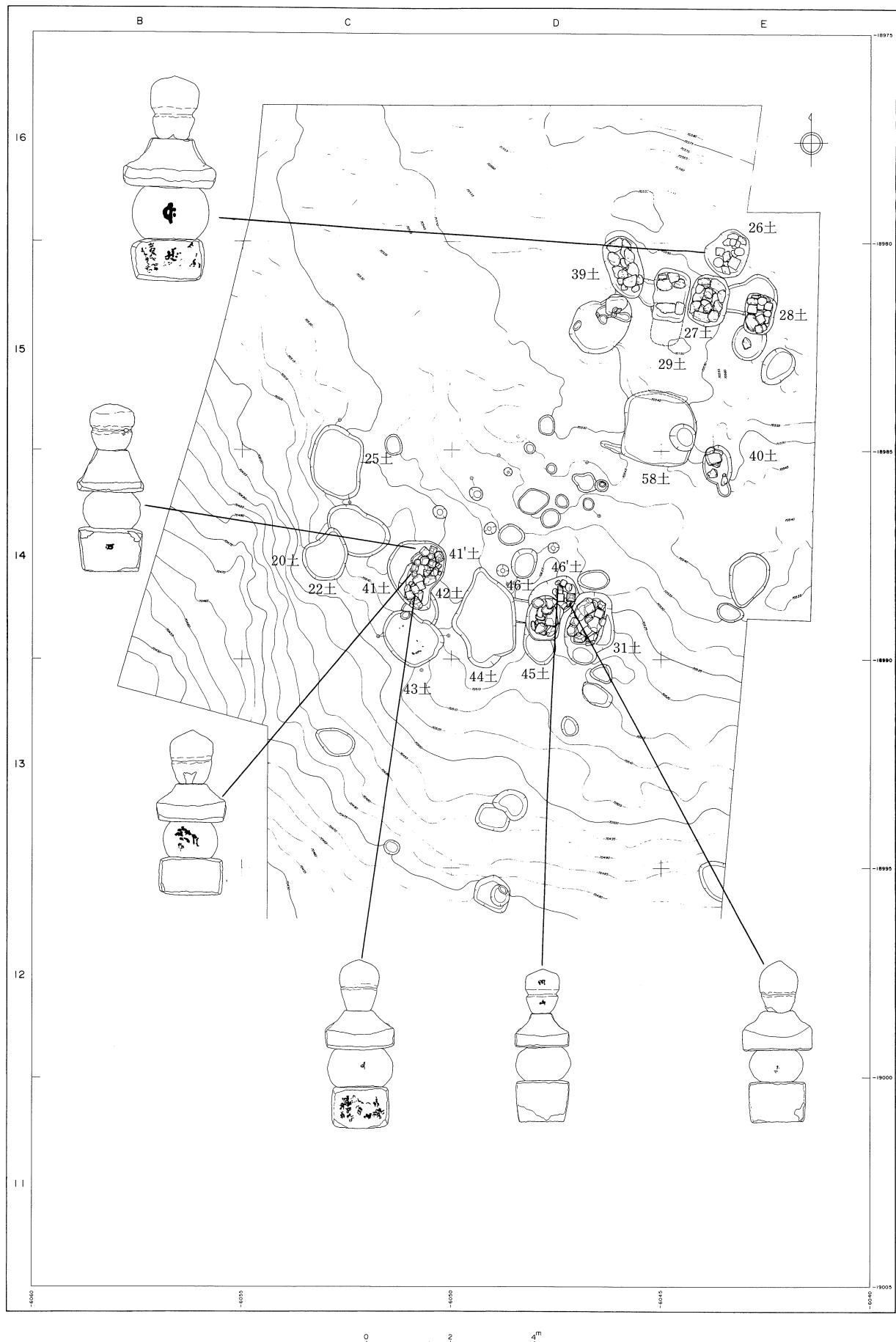
2 横森赤台（東下）遺跡の中世墓坑群

調査結果に関する詳細な内容については、報告書（山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第171集）の方で触れたとおりであり、ここでは概略のみについて触れるものとする。

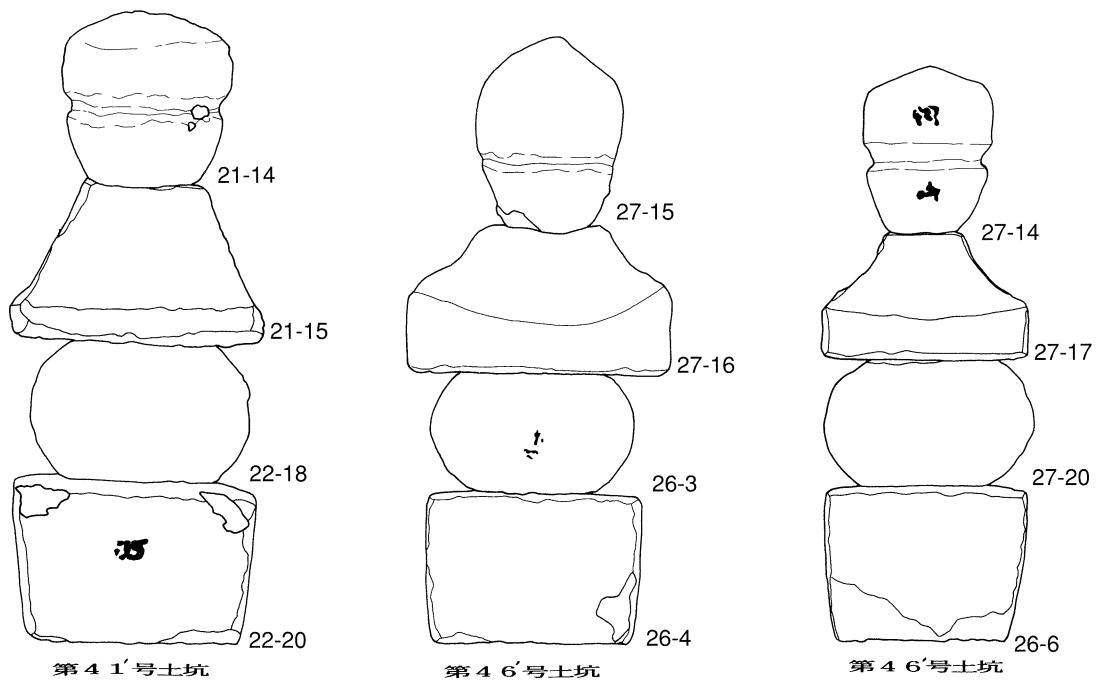
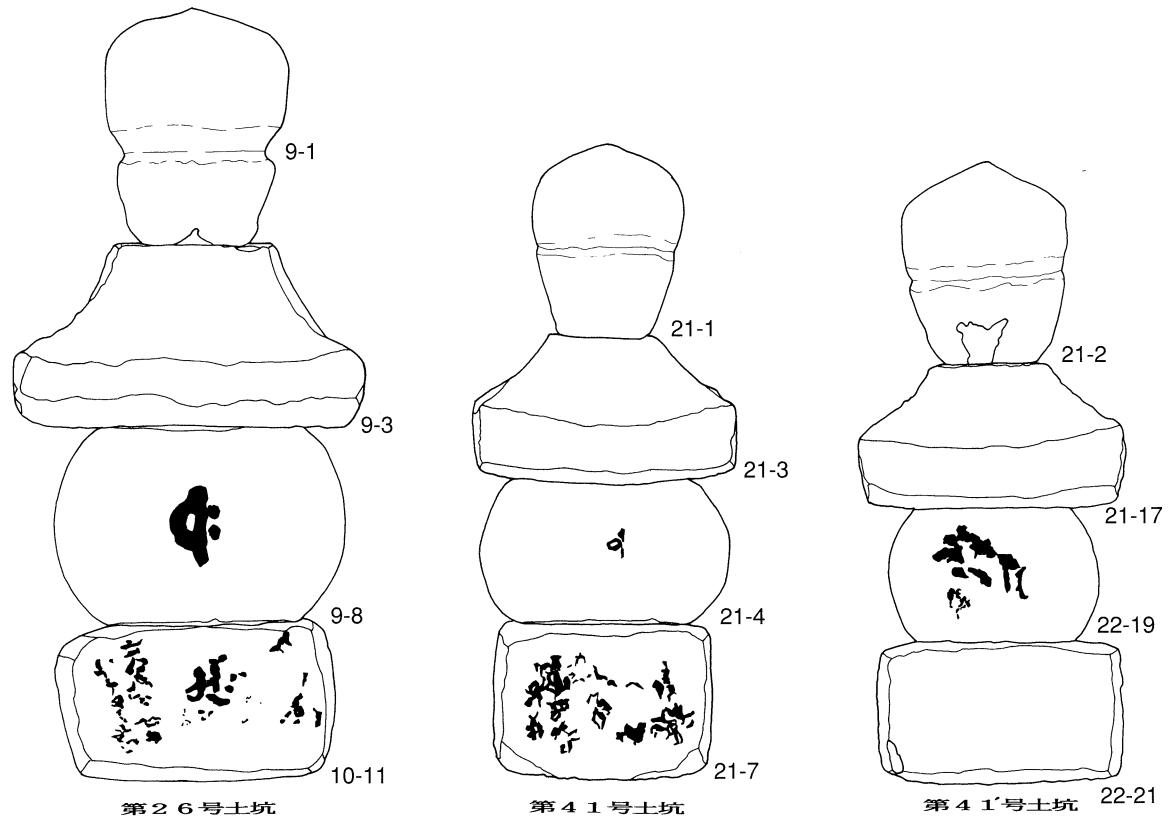
遺跡からは、中世末期（戦国時代）の集団墓坑群（土坑墓13基、火葬跡3基・火葬墓1基）と、墓域の区画溝と考えられる遺構が発見され、これに付随して約200点の五輪塔類と10体の人骨が出土した。これら墓坑群に埋葬された人々は、造墓の年代や立地、周辺の遺跡の分布などから室町時代末期から戦国時代にかけて活躍した開発領主層に相当する人々と考えられる。

墓坑群は第1図に見られるように環状に巡り、墓の無い中央付近が広場として機能していた可能性がある。また、この墓坑群の北側には、これを区画するための溝と考えられるものが東西方向に存在している。土坑墓からは北頭側臥合掌する人骨が発見されており、これは浄土信仰を示すものであろう。覆土からは礫や五輪塔が認められるものが多かったが、覆土に含まれる五輪塔や礫の関係や埋没状況から埋葬方法に違いが認められ、礫のみを伴うものや五輪塔を主体に配しているものなど、埋葬工程の違いから五種類程度に分類することができる。また、平面形態については隅丸長方形・すり鉢形・不整楕円形の三形態が認められるが、こういった墓葬の形態は、15～17世紀代の在り方に類似するものである。火葬跡では不整がかったものが多く、このうち1基のみ坑底部に板状の石が敷き詰められたものがある。火葬墓は、煙道を持つT字形の平面形態を持ち、覆土中から土師質土器の杯が器と蓋状に組み合わされた状態で2面認められたが、この形態的な特徴から極めて中世の火葬施設の特徴を色濃く残すものである。

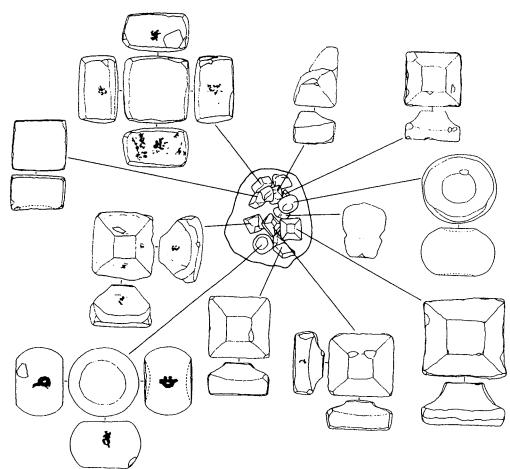
墓坑群から発見された副葬品としては、六道錢と考えられる錢が主体であり、稀なものとして漆碗の塗膜片や、錢を包んでいた紙と撚糸などが認められたのみで、火葬墓から土葬墓へ葬送形態が簡素化され、生活道具類をほとんど含まない該期の特徴を良く示している。



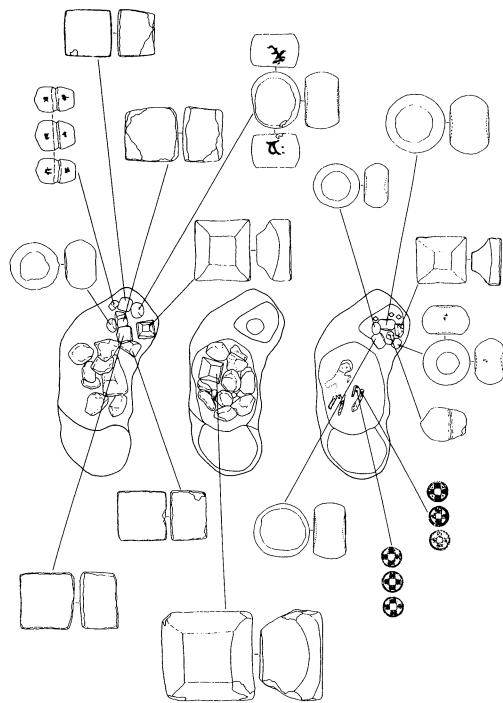
第1図 横森赤台（東下）遺跡中世墓群及び五輪塔出土位置



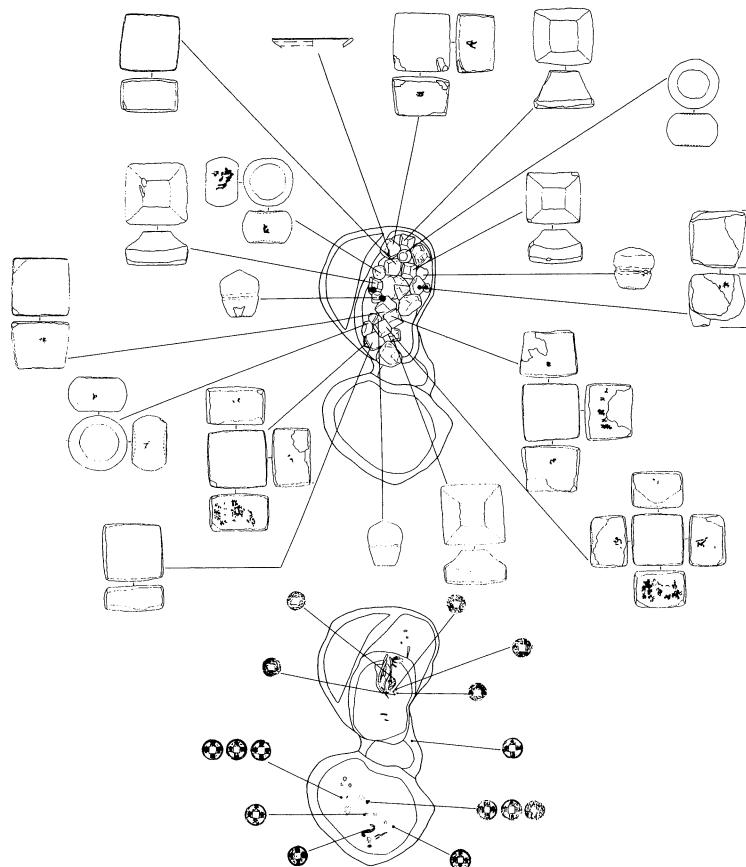
第2図 五輪塔組合せ関係（数字は報告書に記した図版番号）



第26・27号土坑



第45・46・46'号土坑

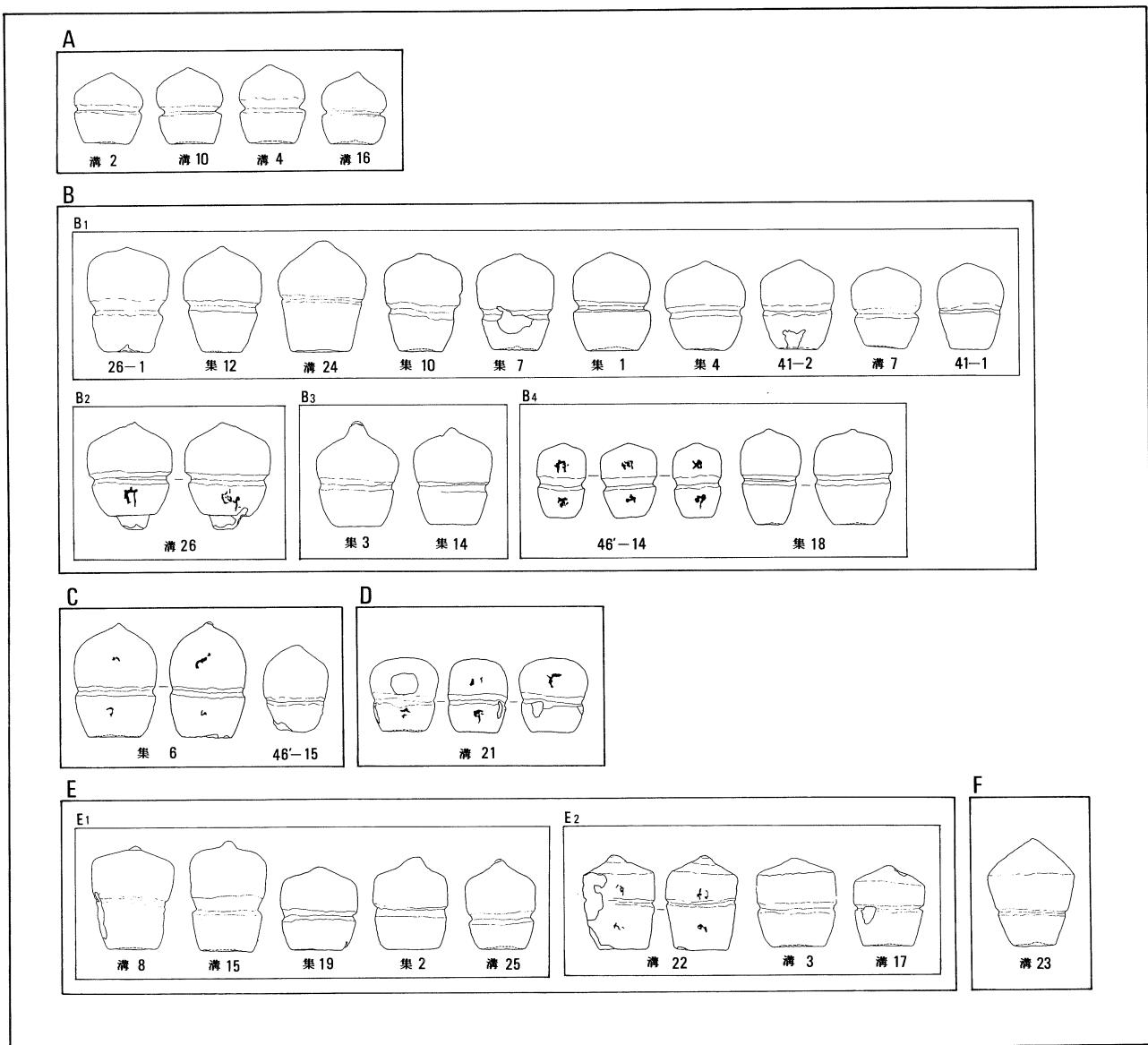


第41・41'・42・43号土坑

第3図 五輪塔組合わせ関係確認土坑遺物出土状況

3 墓坑出土五輪塔のセット関係について

ここでは、遺構別に見た時期的な問題点と五輪塔の形態別の組み合わせについて触れる事にする。横森赤台遺跡からは空風輪50点、火輪50点、水輪38点、地輪54点の合計192点が出土しているが、この内遺構に伴ったものは空風輪31点、火輪34点、水輪27点、地輪41点の合計133点である。これらの中で特筆すべきものとしては、第26号土坑出土の地輪部分には紀年銘である「享禄」と考えられる文字が墨書きされていたほか、第31号土坑出土の地輪部分には四面に梵字が、また南方修業門部分には「奉」の字が墨書きされていた。この他遺構外では集中区から出土したものに、やはり地輪部分から紀年銘と考えられる「永正」の文字が墨書きされたものなどがある。これらの中で、ほぼ同時期に埋没したと考えられる出土状況を示すものから、その分布状態と各個体の大きさから組み合わせを考慮してセット関係を見出した結果、第26・41・41'・46号土坑の各遺構から6セット（第2図）認められた。遺構の特徴としては、第26・46号土坑は子供の墓で、後者からは5歳幼児の骨が出土している。円形プランで掘り込みは浅く、擂鉢形を呈しており、出土した五輪塔は小型のものが多かった。第41・41'号土坑は、隅丸方形プランを呈した成人の墓で、男性と女性の骨が一体ずつ出土している。両者は共にマウンド状にした墓坑上部に五輪塔が建てられていたものと考えられ、遺体が朽ちたと同時にマウンドが陥没し、五輪塔が覆土内に混入したものと考えられる。前述のような埋没状態であるため、その年代的一括性については特に問題が無いものと考えられる。

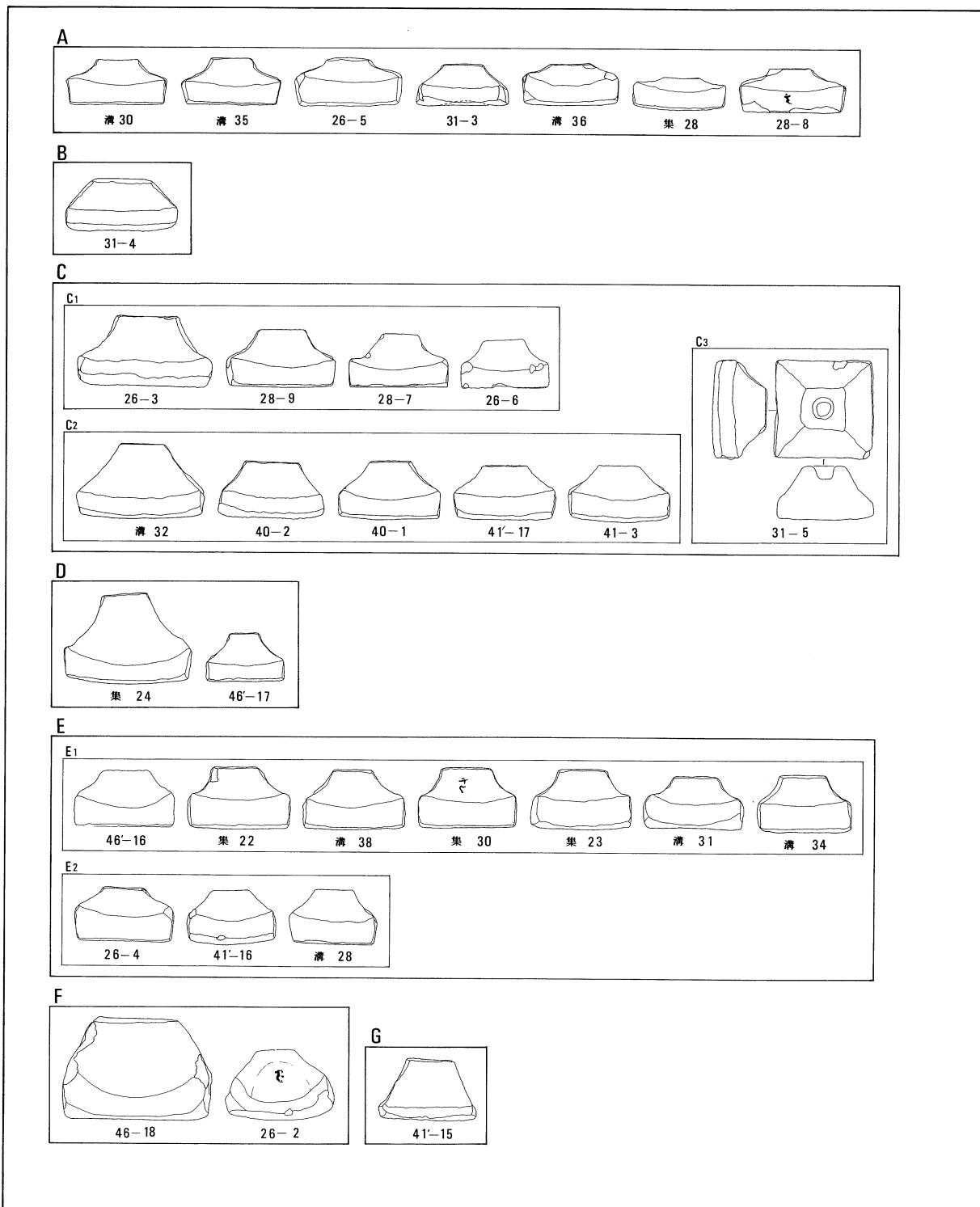


第4図 空風輪形態分類

実年代の把握的については、紀年銘である「享禄」年間が1528～1531年であることから、墓坑そのものは16世紀中葉段階には存在したものと考えられるが、集中区から出土した「永正」年間のものは1504～1520年であり、墓坑群の形成は16世紀前半には始まっていたことを示していることがわかる。

4 五輪塔の形態分類と組み合わせ

形態分類については、報告書の中でも触れたが、形態分類図（第4～7図）に示したものとおして再度確認すると以下のようになる。



第5図 火輪形態分類

空風輪（第4図）

A群：空風輪の大きさがほぼ均等なもので、宝珠形を呈しているもの。

B群：空輪が風輪より大きく、空輪の側面に丸みを持つものを一括したが、これらは4種類に分類できる。

1類：空輪部が風輪より大きく、その頂部がやや潰れ、外面がやや丸みを帯びているもの。

2類：1類と同じ特徴を持つが、風輪下部に舌部を持つもの。

3類：空輪の上部がやや潰れるが、頂部が凸っており、側面がやや丸みを持つもの。

4類：空輪の上部が潰れ、平面部より側面部の厚さが薄いもの。

C群：全体的に丸みを帯び、砲弾型をしているもの。

D群：空輪の上部が潰れ、頂部が平坦なものの。

E群：側面部が直線的で方形がかっているものを一括したが、これらは2種類に分けられる。

1類：空輪上部に稜線が見られないもの。

2類：空輪上部に稜線が見られるもの。

F群：全体的に直線的で、空輪が風輪に比べて大きいもの。

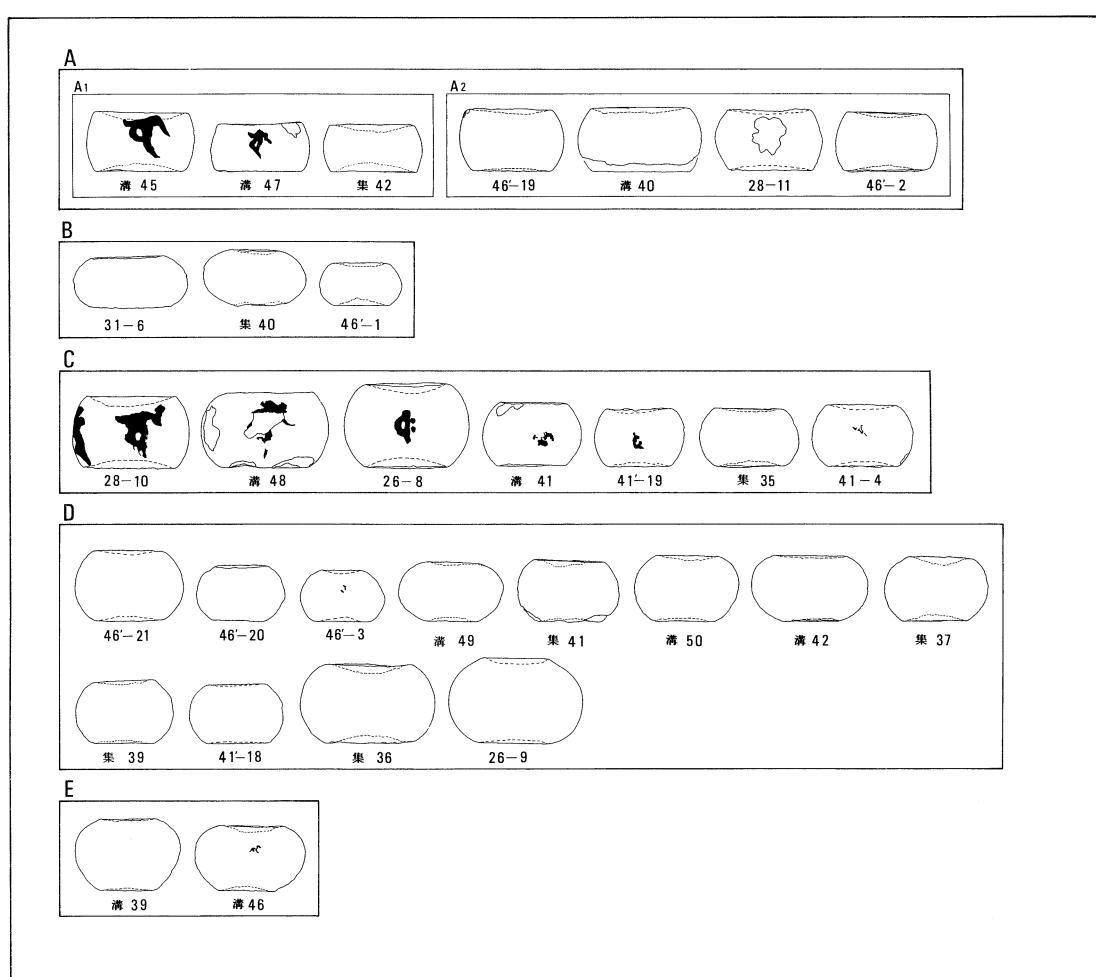
火輪（第5図）

A群：器高が低く、屋根の反りが強いもの。

B群：器高が低く、屋根の側面が直線的なもの。

C群：軒が薄いものを一括したが、これらは3種類に分けられる。

1類：屋根の反りが強いもの。



第6図 水輪形態分類

2類：屋根の反りが弱いもの。

3類：屋根の反りが強く、頂部にホゾ穴が存在するもの。

D群：屋根の反りが強く、屋根の上部の面が狭いもの。

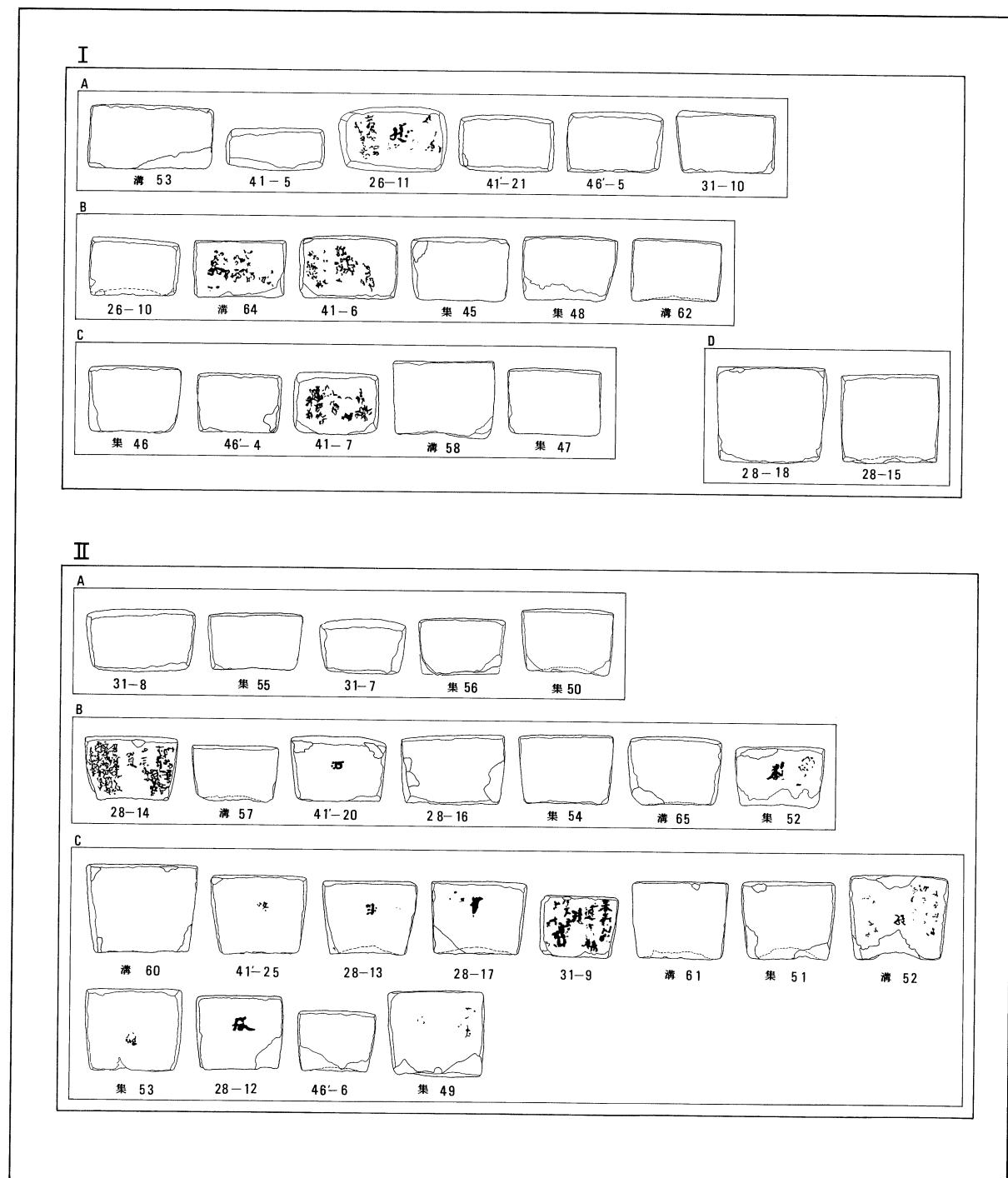
E群：軒が熱いものを一括したが、これらは2種類に分けられる。

1類：屋根の反りが強いもの。

2類：屋根の反りが弱いもの。

F群：全体的に丸みがあり、屋根の反りが強いもの。

G群：屋根の反りが弱く、台形のもの。



第7図 地輪形態分類

水輪（第6図）

A群：上面と下面の幅と、中央部の横幅の差があまり無いものを一括したが、これらは2種類に分けられる。

1類：器高が低く平らなもの。

2類：器高が高いもの。

B群：上面と下面の幅に対して横幅があり、高さが無くやや潰れたような形のもの。

C群：高さがあり、側面のカーブが緩いもの。

D群：高さがあり、側面のカーブがきついもの。

E群：高さがあり、最大幅が中心部よりやや上方にあるもの。

地輪（第7図）

I群：側面が方形を呈しているもの。横幅と高さの比によって、4種類に分けることができる。

A類：横幅／高さの比が1.7以上で、横幅に対して高さが非常に低いもの。

B類：横幅／高さの比が1.5～1.6で、横幅に対して高さが低いもの。

C類：横幅／高さの比が1.3～1.4のもの。

D類：横幅／高さの比が1.0～1.1で、ほぼ正方形のもの。

II群：上底より下底の幅が狭く、側面が逆台形を呈しているもの。横幅と高さの比によって、3種類に分けることができる。

A類：横幅／高さの比が1.6～1.8で、横幅に対して高さが非常に低いもの。

B類：横幅／高さの比が1.4～1.5で、横幅に対して高さがやや低いもの。

C類：横幅／高さの比が1.3以下で、横幅と高さの比があまり無いもの。

以上のような分類結果を示すことができたが、その年代感については空風輪のB群が16世紀中葉に位置付けられることは、近年の研究結果からも明らかであり、本遺跡の形態分布も遺構ごとにまとまりをもっていることからも、これを裏付ける内容である。しかし、地輪については大別されたI群とII群との間に混在する関係が見られ、形態別に見たその新旧関係の位置付けは難しいことがわかる。また火輪の形態からは、15世紀代にみられるものもあることから、実年代としては把握できないが、15～16世紀中葉といった幅で製作されていったものと考えられる。

5 考察

発見された五輪塔から数多くの墨書が認められ、その中に紀年名や凡字などが示されたものが存在したことから、製作と造墓年代を考えていく上で興味深い資料となった。従来の研究成果から、前述のとおり空風輪のB群は、16世紀中葉といった時期に属することが明らかにされている。横森赤台遺跡では、地輪I群A類の第26号土坑出土（26-11）に記された『享禄』年間の紀年銘から16世紀中葉段階に属していることがわかっており、第2図に示したセット関係から空風輪B群1類、火輪C群1類、水輪C類といった組み合わせであり、空風輪はB群の16世紀中葉段階にあたることから、紀年銘との年代的関連性は合致している。空風輪B群1類には、第41・46'号土坑のものが、火輪C群1類には、第28・41・41'号土坑などが、水輪C類には第41・46'号土坑のものも含まれることから、第26・28・41・41'号土坑は16世紀中葉段階に位置付けられるものと考えられる。このことから前述の土坑出土の五輪塔が分布する空風輪B群、火輪のA群・C群1類・C群2類・E群2類・F群・G群、水輪A群2類・C群・D群は同時期と考えられる。溝（52）出土の地輪に記された『永正』年間の紀年銘からII群C類のほぼ台形の形態が16世紀前葉段階に、また前述のようにI群A類が16世紀中葉段階に属していることがわかっているが、地輪のI群C類・D類といったものは14世紀代から見受けられる形態もあり、地輪の形態から見た時期的な分類には、混在関係が認められ明確に時期を示すことができないことが判明し

た。

横森赤台遺跡の調査結果としては、前述のような分析内容から16世紀前半段階を中心とした五輪塔の形態分類と、部分的ではあるが実年代の把握が可能となったことを成果の一つとして示すことができた。このことは、該期の遺跡の調査において五輪塔が出土した際に、多かれ少なかれ年代的位置付けの指標の一つとして活用できるものと信じている。

以上のように今回の調査で発見された五輪塔からは、数多くの墨書が認められ、その中に紀年銘や凡字などが示されたものが存在し造墓年代が解明できた珍しい例であり、このことから戦国期における五輪塔の形態とその墓制形態の一端が明確を明確にすることができた。

終わりに、今回の調査で限られた時代ではあるが、未だ発見例の少ない墓といったものから、15～16世紀代の中世末期の精神文化を考える上で、貴重な資料が発見された訳であり、この成果を生かしていくためにも今後、五輪塔の工具痕からみた製作工程や墨書に関しても考察を加えていこうと考えている。

なお、本稿執筆にあたり、櫛原功一氏（（財）帝京大学山梨文化財研究所）には韮崎市石之坪遺跡出土資料について説明していただき、堀内 亨氏（県教育委員会県史編纂室）には紀年銘に関して、雨宮正樹氏（高根町教育委員会）には高根町内出土の五輪塔についてご教示を賜った。また大塚敦子氏には図版作成にご協力頂いた。末筆ですが、この場を借りて感謝申し上げる次第であります。

参考文献

- 静岡県考古学会 『静岡県における中世墓』（1997）
(財) 長野県埋蔵文化財センター 「対面所遺跡ほか」『上信越自動車道埋蔵文化財調査報告書 14—中野市内その3・豊田村内一』(財) 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 28 (1998)
(財) 帝京大学山梨文化財研究所 『帝京大学山梨文化財研究所報』第36号 (1999)
野代幸和 「第IV章 成果とまとめ」『横森赤台（東下）遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第171集 山梨県教育委員会 (2000)